

平成 30 年 9 月 6 日現在

機関番号：34523

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12298

研究課題名(和文) 東南アジアの祭礼文化における冠物(かぶりもの/頭飾り)の比較研究

研究課題名(英文) Comparative Studies of crown (headgear/ headdress) As festival culture in Southeast Asia

研究代表者

杉浦 康平(Sugiura, Kohei)

神戸芸術工科大学・附置研究所・名誉教授

研究者番号：00226432

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：頭上と天を結ぶ冠物は、それを冠るものに宇宙秩序に似た身体感覚をもたらす。東南アジアでは古くから、天上界のひろがりを模す冠が幾つとなく造形された。この意味で冠は、アジア各地の祭礼で曳きだされる宇宙模型としての山車造形とその発想を重ねあう。本研究は日本の祭礼文化にみられる花笠などを基軸にして、その神話的・造形的背景をインドネシア・韓国・中国の冠と比較する。とりわけ新羅王朝の金冠、バリ島の踊りの冠、中国の王冠などと比較を通じて、それらの造形が示すアジアの宇宙観・身体観などのかかわりを解明するための基盤研究を確立した。

研究成果の概要(英文)：The crown that connects the top of the head and the sky gives the person who crowns it a physical sensation similar to the order of the universe. A long time ago, in Southeast Asia, there were many crowns imitating the world of heaven. In this sense, the concept of "festical float" seen by the Crown and festivals across Asia overlaps.

This study focuses on Hanagasa(used in Japanese traditional performing arts), which is seen in traditional Japanese culture. It compares its mythology and modeling with crown caps from Indonesia, Korea, and China.

In particular, through the comparison of the Golden Crown of the Shilla Dynasty, the dance crown of Bali island and the crown of China, the relationship between these shapes and Asia's view of the universe and the body was unraveled. And determine the basis of this research area.

研究分野：ビジュアルデザイン、アジア図像学

キーワード：アジアの宇宙観・身体観 新羅の金冠 大念仏剣舞(大笠) ジャウク冠 シャナ冠 山(宇宙山)
傘のイコノロジー 曼荼羅と冠

1. 研究開始当初の背景

神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所は、2010年度に開設されて以来アジア各地に多様な造形と象徴性を展開する祭礼の山車・葬送の山車に焦点をあて、「神話的な造形手法」に主眼を置く独自の調査により研究を進めてきた。これまでに行った「アジアの山車」研究の中間的な結論として、山車の山とは「宇宙の中心に聳え立つ須弥山(メール山)を象るもの」、「一瞬の出現、一瞬の消滅をする動く宇宙山」、山車は「一本の生命樹、その出現はこの世に豊穡をもたらす」、「さまざまな靈獣が山車を飾り、山車を動かす」、動く山車が「悪霊・病魔を鎮める」…などの特質を確認した。アジアの山車を特徴づけるこれらの特質の多くのもので、アジアの「かぶりもの」の造形原理にもあてはまると推定される。

本研究計画はアジアの「かぶりもの」の研究を重点的に行う。アジアの「かぶりもの」の造形的特性はアジアの山車の造形原理と深くかかわり、その神話的象徴性を多重に共有している。本研究計画のアジアの「かぶりもの」の研究は、これまでの山車研究の延長ともなる、日本とアジアの「かぶりもの」における造形デザインと象徴性、及び「かぶりもの」を取り巻くイコノロジーのまだ解明されていない基礎研究を完成する。

2. 研究の目的

上記の背景及びこれまでの研究成果をもとに、本研究は日本の祭礼文化にみられる花笠などを基軸にして、その神話的・造形的背景をインドネシア・韓国・中国と比較する。とりわけインドネシアバリ島の仮面舞踊で踊り手がかぶる「ジャウク冠」、新羅王朝の「金冠」、日本の「大念仏笠」、中国の「冕冠」、などと比較して、それらの造形が示すアジアの宇宙観・身体観などのかかわりを解明するための基礎研究を確立する。

3. 研究の方法

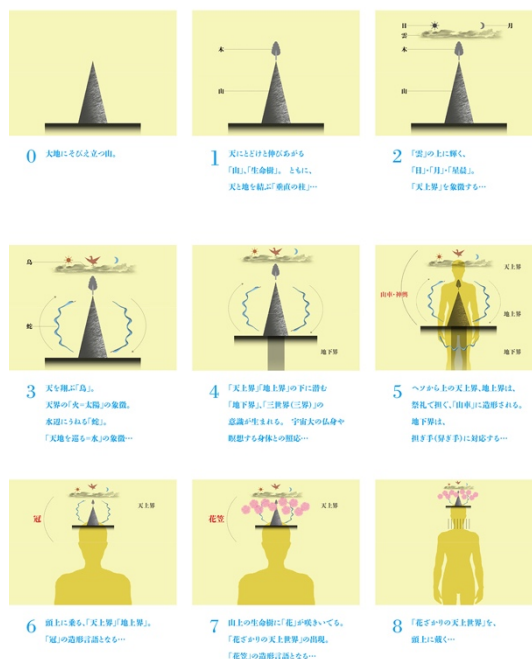
本研究は日本と東南アジアの冠物について、デザイン学、文化人類学、図像学、地域学、空間学、民族芸術学などの方法論(文献資料整理+フィールド・ワーク)を援用しながら、デザイン、造形的な視点から諸特質を統合し、宇宙観、生命観、身体観、神話世界を貫くアジア的造形の基本原理を見いだそうとするものである。研究計画では以下の研究項目を進めた。

- ①27年度:バリ舞踊「ジャウク」の冠とマコタ(Mahkota)との関連を明らかにする。
- ②28年度:新羅の「金冠」と象徴する意味の関連を明らかにする。
- ③29年度:大念仏剣舞の「大笠」と曼荼羅との関連、また中国冕冠の構造原理と宇宙観との関連を明らかにする。
- ④29年度:東アジアにおける日本の大念仏剣舞の「大笠」の位置づけを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 平成 27 年度

27年度は「東南アジアの冠物のデザインと象徴性、及び東南アジアの冠物を取り巻く構造原理を解明するために、本年度は、文献調査、現地調査、とりわけ(「宇宙を戴く」。バリ舞踊「ジャウク」の冠…)などのテーマを立てて研究を進めた。また、研究においては主に「生命樹を冠る」「シャーマニズムの冠、宇宙を冠る」「日本・花祭の冠」「中国・冕冠を始めとする冠文化」「冠ることの意味」「アジアの冠・帽子の系統樹」などの基本調査に基づき、頭上に戴く「アジアの冠と自然」「アジアの冠と生命循環」との関係を体系化し、図解で明らかにした。



①バリ舞踊「ジャウク」の冠と Mahkota

バリの舞踏で踊り手の頭上を飾る「冠(ゲルンガン)のデザイン」は、バリの影絵芝居の「人形が戴く冠」と深いかかわりをもつ。舞踏で使う冠は、影絵人形の冠のデザインに触発されて創られているからである。とりわけ、ジャウクの踊り手が冠るゲルンガンは、バリ舞踏の冠の中でも、風変わりな造形をみせる。踊り手の頭上を飾る「黄金の冠」、ジャウクの冠の全体は、さまざまな飾りものが並びあう「大きな円形の板(直径40センチ弱)」で支えられる。この円板の下には、頭にすっぽり乗せた頭上の冠を固定するための、「輪の形をした枠組み(高さ9センチ・直径18センチほどの)」がついている。円板の中心には、「円錐形の塔」が垂直に伸びあがる。寺院の塔を模す…とされるこの尖塔が、ジャウクの冠を特徴づける。ジャウクの冠を真上から見下すと、40センチ近い大きな板状の円盤を、4分割、あるいは8分割する幾何学構造、「マンダラ」を想わせる構造が見てとれる。冠の下部を支える大きな円盤の板上に飾られたさまざまな形は、「植物」に由来するもの。咲きいでた花や、燃えたつ火に由来するものの集合

体である。冠をおおう造形の集合体が形づくるのは、「活力が渦巻く山」のようなイメージである。この山の形の中に、火のモチーフや、水のモチーフ、植物の葉のモチーフが包みこまれる。山の裾野には、「渦巻く火」が燃えさかる。だが、この火は、燃えたつ火の直接的な表現でなく、山の塊が内部に秘めた地中のエネルギーを象徴する形だといわれている。その上に立ちあがるもの、鳥のように渦巻く形は、「ブンタロ」と呼ばれるツルクサである。下にぶら下がるものは、「木の実(ペペと呼ばれる)」の形である冠の真裏、踊り手の後頭部にあたる位置に、一羽の「ガルダ鳥(ガルダ・ムンクル)の首」が姿を現わす。踊り手が冠をかぶると、ガルダ鳥の首は踊り手の後頭部に現れることになる。真横から見るジャウク冠の複雑な冠の装飾は、中心にそびえる山と、山を囲んで生い茂る樹木の森や、山の周囲にゆらめく生命力の渦を象るものであることが、見てとれる。冠の全体が、アジアの古代宇宙観、「須弥山(メルー山)世界」を象るものだ…と考えられた。一方、マコタ(Mahkota)とは家屋の屋根の先端に取り付ける装飾物であり、僧侶の冠から着想を得て「頂上」を目指す、という想いが込められている。マコタ言葉自体は高いもの、先端、山頂を意味する。マコタは40～45センチほどある。円盤の周囲の四方には、ガルダの聖獣が装飾され、その中心には高く伸びたつ垂直一本柱が立てられている。真上から見下ろすと、四方位に分割された、ジャウク冠と同じくマンダラに似た円形の構図が浮かびあがり、造形の全体が山を象るものと考えられる。



(2) 平成 28 年度

①新羅の「金冠」

新羅の金冠は、5世紀中頃～6世紀前半に、奈勿尼師今の直系金氏王族が用いた葬送用の特殊冠である。現存する新羅の金冠は新羅の金冠塚、皇南大塚北墳、天馬塚、金鈴塚、瑞鳳塚などの六つの古墳から出土した新羅式冠がある。本研究では①なぜ、山形をした生命樹がモチーフとなったのか？なぜ、山形の生命樹を、頭上の冠としてかぶるのか？②なぜ、生命樹に、数多くの翡翠玉(日本では曲玉と呼ばれているもの)が吊るされているのか？③なぜ、鹿の角が添えられているのか？北方シャーマンの冠との関係は？④鳥形の帽子の飾りは何を意味するのか？の研究仮説を通して、新羅の金冠の構造原理と象徴意味を明らかにした。

その結論として、①中央の「出」の字の造形



は天と地を結ぶ宇宙軸であり、その背景には「神壇樹」「蘇塗の大樹」「鶏林の神樹」「大祀三山の神遊林」などがベースになっていると考えられる。②左右の両側に付いている鹿角の形は、再生、宇宙樹の性格を表すが、それは「松柏」との関連では魂の守護、生命の樹を象徴し、「龍角」と見なした場合は魂の守護、昇天、守護龍を象徴する。始祖の誕生神話から見ても、このようなイメージはかなり付加されているだろうと考える。③鳥羽形の立飾になりますと、天の鳥、魂を運ぶ鳥を示す。それもこのような三山や五山、遠い山の上というのが、死者の国を示している。④曲玉の飾りは、王権の象徴、玉(翡翠)信仰、天の鳥、子孫繁栄を象徴する。これらの要素をセットとして、いずれも新羅により選択的に受容され、独自に発展したものであると考えたときに、それらは一つの目的のために結びついたと言える。いわゆる「天と地を結ぶ宇宙軸」「遺体の魂を守る守護神」「魂を運ぶ鳥」「子孫繁栄の象徴」などの意味性が結びついて、一体と成って金冠を形づくったのであると考えられる。

(3) 平成 29 年度

①大念仏剣舞の「大笠」

大念仏剣舞とは8月盆の精霊(祖先)供養として演じられる念仏風流踊りである。岩手県盛岡市周辺では一人の踊り手が「大笠」をかぶり、菩提寺や各戸の庭先で位牌に向かって巡回する、風流踊りが奉納される。大念仏剣舞として行われる民間芸能の一つである。



現在、踊りの上演時期は不定期であるが、基本にお盆に庭元や寺(長善寺)に集まり、先祖供養を目的に踊りを上演する。以前はお盆の8月13日に「笠揃え」をし、それから集落の寺と墓地に詣で、16日までの間に仲間の家の仏を拝んで歩いたという。この踊りは回向踊りで、見ると太夫、世話役、中立、踊り子に分けられる。音頭は「南無阿弥陀仏」を基本にした念仏歌で、その内容は道行(歩き太鼓)・笠振り→入羽→中羽→引羽→中入→笠振り(五拍子)→廻り胴→礼踊りの順序で進める。盆の精霊供養として演じられる剣舞。各家を訪れては、縁側や庭に置かれたその家の位牌に向かって念仏回向をするのが目的である。庭で踊る際に中心に立つのが極楽浄土を表すという大笠(台笠)。大笠は踊り手の頭上に乗せられ、直径1.6メートル(5尺5寸)、重さ30キロ。踊り手の動きでダイナミックに巡回する。笠の中央には三層(あるいは五層)の阿弥陀堂がそびえ立ち、勾欄に囲まれた外縁の四方位には、四つの小さな鳥居(門)が開かれている。

大念仏剣舞の大笠の四門が掲げる額には、(時計廻りに)「発心」「修行」「菩提」「涅槃」

という四段階の修行過程が掲げられ、あるいは、「諸行無常」「是生滅法」「消滅滅己」「寂滅為楽」の四つの「涅槃経・諸行無常偈」が記されている。鳥居(門)の間には金・銀の花(造花)が献納され、薬玉なども添えられる。長く突き出した薬玉は、演者の動きとともに激しくゆれ、つむじ風の動きをまきおこす。仏塔が中心にそびえ立ち、四方位に修行過程や悟りの境地が明記されるという造形は、密教図像の「曼荼羅」の空間構造に一致する。こうした華やかな道具や衣装をまとう、いわゆる「念仏風流」の特色をもつ点で芸能史的にも貴重な伝承といえる。本研究では①大念仏剣舞の歴史的経緯②剣舞の由来③大念仏剣舞の芸能の特徴と意義④大念仏剣舞演じる内容および大念仏剣舞大笠の構造原理と曼荼羅との関連を明らかにした。

②中国「冕冠」



冕冠とは中国皇帝が特別な祭祀が行われたときに冠った冠である。冕冠の具体的な形態は冕板、冕旒、笄、武、瑱などの部品で構成される。冕冠の基本構造原理は上中下三部分が分かれている。冠の上には「延」あるいは「緹」と呼ばれる一枚の「冕板」が載せられている。「冕板」のサイズは横8寸、縦は1尺6寸、「冕板」前の高さは8寸5分、後ろの高さは9寸5分。後ろの高さは前より1寸高くなっているため、やや前の方に傾く形状となっている。それは皇帝の謙遜の美德を象徴し、天下人民の意に耳を傾けると表している。布で包む「冕板」の上には玄色(黒)を用いて天を象徴とし、下には纁色(明るい赤橙色)を用いて、地を象徴する。また、「冕板」の前には円、後ろには方の簡潔な幾何学の寓意は、「天円地方」の哲学思想がある以外、天子は天命によって天下を治める意味合いが含まれている。

冕板の前後の端には「冕旒」と呼ばれる玉が垂らされている。《禮記・玉藻》の中には「天子の玉藻は12本、冠(冕)の前後にたらず、龍袞(龍柄の上衣)で祭祀する」と書いてあり、また《孔穎達・疏》に「天子の玉藻。「藻」とは多彩な絹糸と謂う。以って玉を貫く、玉を以って藻を飾り、故、玉藻と云う。」と書かれている。冕冠の前後には、十二条の垂れ玉がつけられている。条ごとに十二個の玉があり、その順序は赤、白、青、黄、黒の五つ色で配列されている。また、玉と玉との間には一寸あり、一条の長さは十二寸。「藻」は五彩の絹糸で作られ、五行、歳月の運行を象徴すると考えられる。「玉藻」は全体冕冠のデザインの中に視覚のバランスを保つだけでなく、冕板の造形や冕服とも呼応し合っている。これも人体の構造特徴と合い、同時に犯しては

ならず、越えられない隠し立て空間となっている。列となる「玉藻」が皇帝の視線を遮蔽し、皇帝の目の前や脳後に揺さぶりに動く。皇帝に横目で見ない、品行方正、礼制を守る、かつ威厳の意が含まれる。

本研究では冕冠の構造、色彩などの視点から考察し、冕冠の中に隠されている中国の“天円地方”の宇宙観や五行、歳月の運行を象徴すると明らかにした。

(4) まとめ

以上、インドネシア・バリ島の「ジャウク冠」、韓国新羅の「金冠」、日本大念仏剣舞の「大笠」、中国皇帝の「冕冠」四つの特異な冠の造形原理を比較すると、幾つかの相似点が確認された。①「ジャウク冠」と「大笠」二つの冠は、いずれも「頭上に戴く大きな円形の冠」である。ジャウク冠は直径が40センチほどの冠だが、大念仏踊の大笠では直径が1.5メートル。演者の上半身をすっぽり覆うほどの大きさと重さをもつ。②二つ冠の円盤の中心に「山や柱(生命樹)、あるいは、仏塔などの中心軸をたちあげている」ことである。③この中心軸の周囲には、「逆巻く渦が巻きおこり、植物が繁茂する枝ぶりや、咲き出した花」があしらわれる。「活力ある動きの形が周囲の空間にあふれ、ざわめく風に包まれた造形」であることにも注目する。④ジャウク冠、大念仏剣舞の大笠の中心を巡る構造と装飾は、ときに、ヒンズー教、仏教が説く古代宇宙観「須弥山(メルー山)世界」を象るものと推定される。⑤新羅の「金冠」と中国の「冕冠」二つの冠いずれも「天(円)と地(方)を結ぶ宇宙軸」である。「金冠」に表れている山という概念はジャウク冠、大念仏剣舞の大笠に表れている須弥山(メルー山)概念と重なっている。⑥新羅の「金冠」と中国の「冕冠」二つの冠はどちらも玉が使われている。「冕冠」の玉は五行、歳月の運行を象徴するものと対して、「金冠」の玉は天の鳥、子孫繁栄を象徴するものである。本研究では、インドネシア、韓国、日本、中国の冠物とその意匠分析に焦点をあて、日本と東、東南アジアの冠物の造形を明確化することによって、冠物の造形原理の理解を深めることができた。四つの「かぶりもの」は、相互に離れた文化圏に散在し、異なる宗教・文化的背景に帰属して用いられ、さらに、それぞれが成立年代を異にする「かぶりもの」である。だが意外なことに、これらの四つの頭上を飾る大きな冠を並べてみると、地域・文化・宗教の違いをこえて相互に共通する、注目すべき造形言語で結ばれている。

本研究で得た冠物の造形原理の理解をデザイン領域において実践的に活用することによって新たな視覚言語を習得することができた。本研究を通じて編み出されるデザイン研究の方法論は、今後、別のクリエイティブ領域でも応用することが可能であり、新たな方法論を築くという点から見ても高い教育的価値があると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 曾和英子『ジャウク踊およびその冠に見られるバリ島民のコスモロジー』社会芸術学会、査読あり、1 巻 2016. 11 計 12 ページ
- ② 今村文彦、杉浦康平、齊木崇人、山之内 誠、黄國賓、さくまはな、長野真紀、曾和英子『アジアのデザイン文化の比較研究/山車の造形と祭礼文化を中心にして(5)』神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』2016. 11、計 4 ページ
- ③ 黄國賓『宇宙を冠る…中国“冕冠”考』神戸芸術工科大学 RIAD 報告書 2016、査読なし、計 5 ページ
- ④ 黄國賓、さくまはな、杉浦康平『岩手県盛岡市における永井大念仏剣舞について』神戸芸術工科大学 RIAD 報告書 2017、査読なし、計 5 ページ
- ⑤ 曾和英子、黄國賓、さくまはな、長野真紀、NYOMAN SUDARSANA『バリ島ジャウク冠について』RIAD 報告書 2017、査読なし、計 7 ページ
- ⑥ 黄國賓、さくまはな、IDA BAGUS EKA『バリ島の僧侶冠について』RIAD 報告書 2017、査読なし、計 16 ページ
- ⑦ 長野真紀、黄國賓、さくまはな、曾和英子、I KETUTT PRADNYA『バリ島ウブドにおける建築の冠 プムクブクとマコタ』神戸芸術工科大学 RIAD 報告書 2017、査読なし、計 3 ページ
- ⑧ ニョマン・スダルサナ『ジャウクの冠をめぐるさまざまなこと』神戸芸術工科大学 RIAD 報告書 2017、査読なし、計 10 ページ

[学会発表] (計 3 件)

- ① 杉浦康平『頭上に、宇宙を戴く…』(「宇宙を戴く」「バリ舞踊「ジャウク」の冠…研究会」神戸芸術工科大学 2015. 11
- ② 杉浦康平『中国・皇帝の冠』(神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所研究会) 神戸芸術工科大学 2015. 12
- ③ 杉浦康平『大念仏傘と曼荼羅の関係をさぐる』神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所、2017. 02

[図書] (計 1 件)

- ① 杉浦康平、黄國賓、さくまはな、曾和英子、長野真紀『神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所報告書 2015』神戸芸術工科大学 2015

[その他]

ホームページ等

- ① 神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所「アジアの冠」研究 [1]

<http://www.kobe->

[du.ac.jp/2015/10/50199/](http://www.kobe-du.ac.jp/2015/10/50199/)

- ② アジアンデザイン研究所講演会 韓国「新羅の金冠」…造形の基本とその神話的意味…」神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所「アジアの冠」研究 [2]
<http://www.kobe-du.ac.jp/2016/06/53008/>
- ③ アジアのデザイン文化の比較研究/山車の造形と祭礼文化を中心にして(5)
https://kobedu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=189&item_no=1&page_id=13&block_id=30
- ④ 「宇宙を戴く」。バリ舞踊「ジャウク」の冠神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所「アジアの冠」研究 [3]
<https://www.kobe-du.ac.jp/2015/10/50199/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉浦 康平 (SUGIURA Kohei)
神戸芸術工科大学・附置研究所
名誉教授
研究者番号：00226432

(2) 研究分担者

黄 國賓 (HUANG Kuo-Pin)
神戸芸術工科大学・芸術工学部・教授
研究者番号：50441382

今村 文彦 (IMAMURA Fumihiko)

神戸芸術工科大学・芸術工学部・教授
研究者番号：50213244

山之内 誠 (YAMANOUCHI Makoto)

神戸芸術工科大学・芸術工学部・教授
研究者番号：40330493

さくま はな (SAKUMA Hana)

神戸芸術工科大学・芸術工学部・准教授
研究者番号：00589202

長野 真紀 (NAGANO Maki)

神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・助教
研究者番号：10549679

曾和 英子 (SOWA Eiko)

神戸芸術工科大学・附置研究所・研究員
研究者番号：80537134

齊木 崇人 (SAIKI Takahito)

神戸芸術工科大学 芸術工学研究科
教授
研究者番号：90195967